

看護学生における達成動機の因子構造 －各回生の1年次から3年次まで－

Factorial structures of achievement motive in the college students
—from a year to 3 year in a class—

坂 本 知 子

Tomoko Sakamoto

(静岡県立大学短期大学部)
(University of Shizuoka)

1. 序論

達成動機(achievement motive)は、自己のすぐれた基準をもとに物事をやり遂げようとする動機である。マレー(Murray,H.A.1938)は、社会的動機 (social motive) の一つとして、人間行動の中に達成動機をあげた。その後、マックレランドとアトキンソンら (McClelland,D.C., Atkinson,J.w.,etal. 1953) が、マレーの TAT 方式を採用し、能動的な動機の1つとして達成動機を体系的に理論化した。

質問紙構成の過程で、達成動機の因子分析研究が行われた。達成動機の因子構造について、ベンディグ (Bendig.1964) は、個人的満足感(SA : self-reassurance)、競争的満足感(SC : social competition)、社会的満足感(SR : social reinforcement)の三次元30項目から成るNA(Need Achievement)尺度を構成した。その結果、因子負荷量に基づいて項目が選択され、社会的状況に依存しない “個人的達成欲求” と社会的志向の “社会的達成欲求” の20項目の尺度が作られた。

今回使用した堀野らの達成動機の測定尺度の構成は、「自己充実的達成動機」と「競争的達成動機」の2因子の構造を持つ23項目からなる尺度である。回答形式は、選択式で、尺度内容は、評定段階「1. 全然あてはまらない」から「7. 非常によくあてはまる」までの7段階の評定尺度式の回答を求めたものである。

本研究は、①看護短期大学生は、どのように達成動機をもつか。②各回生の年次推移による因子構造の変化、③年次別因子構造の変化を明らかにする目的で行った。

2. 研究方法

1998年、1999年、2000年、2001年に、A看護短期大学の3つの回生に対し、達成動機を測定した。測定時期と年次表記は、学年終了時とした。

測定尺度は、堀野緑(1987)¹⁾ 堀野緑・森和代(1991)²⁾ によって開発された達成動機の測定尺度を用い、質問紙による自己評定法を実施した。データ解析は、測定された数値を因子分析にかけ、プロマックス回転により因子を抽出した。

3. 結果および考察

1) 看護学生の因子構造

各因子の命名は、個人的発達欲求と社会的発達欲求の2つの側面から因子負荷量が高値の因子項目を選択した。

Ⅱ回生の1年次の因子構造は、 f_1 個性尊重実行衝動因子、 f_2 成功期待因子、 f_3 勝利執着因子、 f_4 自我優越因子、 f_5 自己育成因子、 f_6 上昇志向因子、 f_7 個性尊重因子だった。2年次の因子構造は、 f_1 個性尊重実行衝動因子、 f_2 成功期待因子、 f_3 個性尊重因子、 f_4 自己育成因子、 f_5 自我優越成功願望因子、 f_6 勝利執着因子だった。

3年次の因子構造は、 f_1 自己育成因子、 f_2 自我優越因子、 f_3 勝利執着因子、 f_4 楽観的自己顯示因子、 f_5 上昇志向因子、 f_6 個性尊重実行衝動因子、 f_7 成功期待因子だった。

Ⅲ回生の1年次の因子構造は、 f_1 個性尊重因子、 f_2 自己育成因子、 f_3 自我優越成功願望因子、 f_4 自我優越因子、 f_5 成功期待因子、 f_6 個性尊重上昇志向因子だった。

2年次の因子構造は、 f_1 勝利執着因子、 f_2 個性尊重因子、 f_3 楽観的実行衝動因子、 f_4 自我優越卓越願望因子、 f_5 課題指向自己育成因子、 f_6 自己育成因子、 f_7 課題指向成功願望因子、 f_8 自我優越因成功願望子だった。

3年次の因子構造は、 f_1 自我優越成功願望因子、 f_2 自己育成因子、 f_3 自我優越因子、 f_4 課題指向自己顯示因子、 f_5 個性尊重因子、 f_6 実行衝動因子、 f_7 成功期待因子だった。

IV回生の1年次の因子構造は、 f_1 個性尊重成功願望因子、 f_2 自我優越卓越願望因子、 f_3 成功期待因子、 f_4 楽観的自己顯示因子、 f_5 自己育成成功願望因子、 f_6 課題指向因子、2年次の因子構造は、 f_1 成功期待因子、 f_2 楽観的勝利執着因子、 f_3 自己育成因子、 f_4 課題指向実行衝動因子、 f_5 個性尊重因子、 f_6 課題指向因子だった。

3年次の因子構造は、 f_1 自我優越因子、 f_2 個性尊重因子、 f_3 成功期待因子、 f_4 自己育成因子、 f_5 楽観的自己顯示因子、 f_6 課題指向勝利執着因子、 f_7 個性尊重実行衝動因子だった。(表2, 表3, 表4, 表5)。

(1) Ⅱ回生 (1年次Ⅱ-i, 2年次Ⅱ-ii, 3年次Ⅱ-iii)³⁾

(2) Ⅲ回生 (1年次Ⅲ-i, 2年次Ⅲ-ii, 3年次Ⅲ-iii)

1年次では、 f_1 の項目は、「決められた仕事の中でも個性を生かしてやりたい」や「人と競争するより、人とくらべることができないようなことをして自分をいかしたい」、「何か小さことでも自分にしかできないことをして自分をいかしたい」などから個性尊重因子と命名した。 f_2 の項目は、「いろいろなことを学んで自分を深めたい」や「何でも手がけたことは最前をつくしたい」や「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」などから自己育成因子と命名した。

f_3 の項目は、「今の社会では、強いものが世に、勝ち抜くものだ」と「成功するということは、名譽や地位を得ることだ」などから、自我優越成功願望因子と命名した。

f_4 の項目は、「どうしても私は人より優れたいとおもう」と「勉強や仕事を努力するのは、他の人にまけないためだ」などから自我優越因子と命名した。

f_5 の項目は、「社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」と「世に出て成功したいと強く願っている」などから、成功期待因子と命名した。

f_6 の項目は、「ものごとは他の人よりうまくやりたい」と「他人と競争して勝つとうれしい」という反面、「ちょっとした工夫をすることが好きだ」などとしていることから、個性尊重上

昇志向因子と命名した。

2年次では、

f 1の項目は、「成功するということは、名誉や地位を得ることだ」や「就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい」と成功願望が強く「勉強や仕事を努力するのは、他の人にまけないためだ」と他をうち負かす要素を含むため、勝利執着因子と命名した。

f 2の項目は、「決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」や「何か小さいことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う」などから、個性尊重因子と命名した。

f 3の項目は、「今日一日何をしようかと考えることはたのしい」や「こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする」に「みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」を含むことから、楽観的実行衝動因子と命名した。

f 4の項目は、「ものごとは他の人よりうまくやりたい」や「他人と競争して勝つとうれしい」、「どうしても私は人より優れていたいとおもう」としながらも、「人と競争するより、人と比べることができないようなことをして自分をいかしたい」など近似して競争するより、卓越した別の域を求めていることから、自我優越卓越願望因子と命名した。

f 5の項目は、「何でも手がけたことは最善をつくしたい」や「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」など、設定された課題により高い自らの基準で成し遂げようとしていることから、課題指向自己育成因子と命名した。

f 6の項目は、「いろいろなことを学んで自分を深めたい」や「いつも何か目標を持っていていたい」などから、自己育成因子と命名した。

f 7の項目は、「社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」や「今の社会では、強いものが世に現れる」としている反面、「人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う」など競争して勝ち取ると共に自分自身にうち勝つことを含めている子たちから、課題指向成功願望因子と命名した。

f 8の項目は、「世に出て成功したいと強く願っている」や「競争相手に負けるのはくやしい」としながら、「結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい」としているため、自我優越成功願望因子と命名した。

3年次では、

f 1の項目は、「就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい」や「勉強や仕事を努力するのは、他の人にまけないためだ」などから、自我優越成功願望因子と命名した。

f 2の項目は、「いつも何か目標を持っていていたい」や「いろいろなことを学んで自分を深めたい」や「結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい」などから、自己育成因子と命名した。

f 3の項目は、「どうしても私は人より優れていたいとおもう」や「競争相手に負けるのはくやしい」としながら「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」など、困難さをやり遂げようとしていることから、課題指向自我優越因子と命名した。

f 4の項目は、「何でも手がけたことは最善をつくしたい」や「何でも手がけたことは最善をつくしたい」としながら、「みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」など評価を期待していることから、課題指向自己顯示因子と命名した。

f 5の項目は、「決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」や「ちょっとした工夫をすることが好きだ」などから、個性尊重因子と命名した。

f 6 の項目は、「こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする」などから、実行衝動因子と命名した。

f 7 の項目は、「世に出て成功したいと強く願っている」などから、成功期待因子と命名した。

(3)IV回生（1年次II-i, 2年次II-ii, II 3年次-iii）

1年次では、

f 1 の項目は、「決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」や「ちょっとした工夫をすることが好きだ」や「何か小さいことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う」など個性を重視しながらも、「世に出て成功したいと強く願っている」としていることから、個性尊重成功願望因子と命名した。

f 2 の項目は、「ものごとは他の人よりうまくやりたい」や「どうしても私は人より優れていたいとおもう」と共に、「人と競争するより、人と比べることができないようなことをして自分をいかしたい」としていることから、自我優越卓越願望因子と命名した。

f 3 の項目は、「成功するということは、名誉や地位を得ることだ」や「社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」などから、成功期待因子と命名した。

f 4 の項目は、「今日一日何をしようかと考えることはたのしい」や「みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」などから、楽観的自己顯示因子と命名した。

f 5 の項目は、「何でも手がけたことは最善をつくしたい」や「人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う」としながら、「今の社会では、強いものが出生し、勝ち抜くものだ」など競争にうち勝とうとしていることから、自己育成成功願望因子と命名した。

f 6 の項目は、「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」や「結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい」や「いつも何か目標を持っていたい」など、目標に向かって邁進しようと考えられるため、課題志向因子と命名した。

2年次では、

f 1 の項目は、「成功するということは、名誉や地位を得ることだ」や「世に出て成功したいと強く願っている」や「社会の高い地位をめざすことは重要だと思う」などから、成功期待因子と命名した。

f 2 の項目は、「ものごとは他の人よりうまくやりたい」や「他人と競争して勝つとうれしい」や「みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」などから、楽観的勝利執着因子と命名した。

f 3 の項目は、「人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う」や「いろいろなことを学んで自分を深めたい」などから、自己育成因子と命名した。

f 4 の項目は、「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」と「こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする」などから、課題指向実行衝動因子と命名した。

f 5 の項目は、「決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」や「人と競争するより、と比べることができないようなことをして自分をいかしたい」などから、個性尊重因子と命名した。

f 6 の項目は、「いつも何か目標を持っていたい」から、課題指向因子と命名した。

3年次では、

f 1 の項目は、「他人と競争して勝つとうれしい」や「ものごとは他の人よりうまくやりたい」

などから、自我優越因子と命名した。

f 2 の項目は、「決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」や「ちょっとした工夫をすることが好きだ」などから、個性尊重因子と命名した。

f 3 の項目は、「成功するということは、名誉や地位を得ることだ」や「世に出て成功したいと強く願っている」などから、成功期待因子と命名した。

f 4 の項目は、「いろいろなことを学んで自分を深めたい」「人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う」などから、自己育成因子と命名した。

f 5 の項目は、「何か小さいことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う」や「みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」などから、楽観的自己顯示因子と命名した。

f 6 の項目は、「何でも手がけたことは最善をつくしたい」としながらも、「勉強や仕事を努力するのは、他の人にまけないためだ」としていることから、課題指向勝利執着因子と命名した。

f 7 の項目は、「今日一日何をしようかと考えることはたのしい」と「人と競争するより、人と比べることができないようなことをして自分をいかしたい」などから、個性尊重実行衝動因子と命名した。

2) 各回生の年次推移による因子構造の変化

(1) II回生（1年次II-i, 2年次II-ii, 3年次II-iii)³⁾

(2) III回生（1年次III-i, 2年次III-ii, 3年次III-iii)

同一回生の各年次毎に因子を抽出した。その結果、1年次では6因子、2年次では8因子、3年次では7因子を抽出した。同一回生内で因子数と因子構造に相違がみられた（表5）。

f 1 は、1年次では自己充実的達成動機であったが、2年次、3年次では、競争的達成動機に変わった。また、f 1 の因子項目は、3年次では、社会的成功と競争にうち勝つことが同一項目に含まれ、成功内容を含む形で選択されている。f 2 は、1年次、3年次とも自己充実的であるが、3年次では、他者の期待を切り離して、自己育成をはかっている。それは、2年次において、課題指向の中で、自己育成を捉える準備段階を経ているとも考えられる。

(3) IV回生（1年次II-i, 2年次II-ii, 3年次III-iii)

1年次では6因子、2年次では6因子、3年次では7因子を抽出した。同一回生内で因子数と因子構造に相違がみられた。

f 1 は、2年次で競争的達成動機に移行しているが、3年次では、競争意識が前面に出ている。早期に競争を意識した場合、一般的社会的成功より、身近な他者に対する優位性を重視することが考えられる。1年次と3年次で、”最善を尽くすことで競争にうち勝つ”という傾向を示していることから、最終年次に国家試験を控えていることが影響しているとも考えられる。自己の動機を充足させたためには、社会的環境の影響を受けるため、自己充実的動機と競争的動機を同時に捉えやすいとも考えられる。

3) 年次別因子構造の変化

1年次は、II回生、III回生では、f 1 が自己充実的だった。しかし、IV回生では、自己充実的項目に競争的内容が含まれている。これは、勉強や仕事への努力の結果を能力とし、自己個性と社会的成功を結びつけているとも考えられる..

3年次は、II回生、III回生では、f 1 が競争的因子で、f 2 が自己充実的だった。しかし、

自己充実的であるが、競争的に捉えている項目は、各回生で分散していた。

これまで、自己充実的達成動機と競争的達成動機によるモデル化^{4) 5)}において、因子間の関連をみてきたが、因子構造においても、分散しやすい項目がみられた。

引用文献

1. 堀野 緑：達成動機の構成因子の分析，教育心理学研究，35，148-154，1987.
2. 堀野 緑，森 和代：抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因，教育心理学研究，39，308-315，1991.
3. 坂本知子，川島佳千子：看護短大生の達成動機の因子構造，静岡県立大学短期大学部紀要，14-2，105-109，2000.
4. 坂本知子，川島佳千子：看護学生の達成動機モデル(1)，静岡県立大学短期大学部紀要，15，59-64，2002.
5. 坂本知子，川島佳千子：看護学生の達成動機モデル(2)，静岡県立大学短期大学部紀要，16，79-84，2003.

(2003年11月4日受理)

表1 達成動機測定尺度

項目内容
1. いつも何か目標を持っていてたい
2. ものことは他の人よりうまくやりたい
3. 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい
4. 人と競争するより、人とくらべることができないようなことをして自分をいかしたい
5. 他人と競争して勝つとうれしい
6. ちょっとした工夫をすることが好きだ
7. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う
8. みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい
9. 競争相手に負けるのはくやしい
10. 何でも手がけたことは最善をつくしたい
11. どうしても私は人より優れていきたいと思う
12. 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う
13. 勉強や仕事を努力するのは、他の人にまけないためだ
14. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい
15. 今の社会では、強いものが出生し、勝ち抜くものだ
16. いろいろなことを学んで自分を深めたい
17. 就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい
18. 成功するということは、名誉や地位を得ることだ
19. 今日一日何をしようかと考えることはたのしい
20. 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う
21. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う
22. 世に出て成功したいと強く願っている
23. こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする

表2 因子負荷量 (II-i回生)

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
SF14	.849	.011	-.106	.014	-.185	.096	.175
SF16	.828	.011	.110	.104	.080	-.013	-.043
SF23	.749	-.021	-.036	.397	.131	.055	.078
SF12	.742	-.090	.154	-.070	-.039	-.126	.086
SF8	.736	.020	-.004	.130	-.044	.109	.137
SF4	.689	-.169	.174	.055	-.205	.021	-.009
SF19	.603	-.122	.007	.577	.169	-.103	-.160
SF7	.516	-.153	-.087	-.350	.310	.037	-.174
SF6	.430	.399	-.142	-.129	-.013	-.067	.108
CP18	-.111	.776	-.025	.124	.005	-.080	.095
CP20	-.049	.746	-.112	.080	.194	.285	-.248
CP17	.091	.699	.206	-.061	.021	-.137	.227
CP13	-.178	.445	.351	.255	-.096	.082	-.217
CP5	.002	.026	.975	.191	.071	-.082	.064
CP9	.374	.131	.477	-.263	-.214	.063	-.047
CP22	.022	-.055	.357	-.254	.185	.315	-.157
CP11	.145	.130	.052	.780	-.038	-.015	-.062
SF21	-.074	.085	.019	.009	1.012	-.124	-.059
SF10	.246	.075	.126	-.351	.401	-.057	.261
CP2	-.082	-.153	.148	.069	.038	.913	.383
CP15	.229	.138	-.199	-.089	-.299	.535	-.082
SF3	.331	.038	.037	-.133	-.111	.081	.677
SF1	.479	.168	-.135	.085	.169	.081	.504

表3 因子負荷量 (III-i回生)

	因子					
	1	2	3	4	5	6
23	.975	-.067	-.068	.296	.127	-.004
19	.629	-.078	-.081	-.001	.132	-.125
3	.559	.017	.134	-.086	-.078	.322
12	.529	.221	.132	-.034	-.036	.237
4	.417	-.034	.177	-.218	-.180	.260
1	.300	.019	-.205	-.131	-.045	.154
10	-.223	.894	.000	.012	.272	.149
14	.144	.587	.016	.031	-.179	-.278
16	.343	.505	.053	.095	.010	-.118
7	.175	.503	-.112	.016	-.105	-.042
21	.253	.468	-.311	-.178	.096	.065
8	-.234	.449	.008	.213	.012	.114
17	.047	.011	.945	.050	.093	-.038
15	-.032	-.150	.502	-.092	.164	.021
18	-.154	.123	.424	.075	.381	.031
9	.007	.140	.032	.970	-.200	-.104
13	-.025	-.066	-.015	.550	.352	.071
11	.070	-.022	-.115	.481	.221	.271
20	.023	.095	.209	-.145	.871	-.022
22	.229	-.058	.399	.001	.510	-.075
2	.167	-.126	-.131	.118	.090	.804
6	.181	.089	.026	-.143	.045	.536
5	-.055	.048	.150	.406	-.270	.518

表4 因子負荷量 (IV-i回生)

	因子					
	1	2	3	4	5	6
-3	.845	.067	-.164	.083	-.031	-.141
22	.727	-.160	.318	.165	-.151	.033
12	.727	.030	.067	-.081	.115	.020
6	.576	.078	-.210	.024	-.063	.137
16	.471	-.193	.299	-.057	.195	.046
2	.133	.853	-.022	.122	.088	-.222
9	-.028	.833	.011	-.098	-.023	.096
5	-.058	.637	.281	.089	-.148	.033
11	-.050	.490	.447	.096	-.060	.035
4	.375	.387	-.201	-.136	.304	.044
18	-.184	-.041	.757	-.030	.282	-.068
17	.119	.125	.673	.025	-.222	.064
20	-.045	-.052	.540	.335	.053	.044
13	-.028	.174	.529	-.256	-.030	.099
19	-.076	.072	.024	.990	-.118	.008
23	.408	-.078	-.204	.593	-.020	-.007
8	.071	.058	.273	.304	.276	-.040
10	.017	.008	-.025	.136	.723	.215
15	.040	-.036	.307	-.029	.627	-.259
7	-.006	-.039	-.043	-.184	.497	.139
21	-.067	-.058	.028	.144	.135	.946
14	.261	-.023	.152	-.389	-.087	.421
1	.048	.124	-.013	.363	.081	.384

表5 回生及び年次別因子構造

	因子	II回生		III回生		IV回生	
年次	f1 個性尊重 実行衝動	個性尊重 4. 6. 7. 8. 12. 14. 16. 19. 23.	個性尊重	23. 19. 3. 12. 4. 1.	個性尊重 成功願望	3. 22. 12. 6. 16.	
	f2 成功期待	13. 17. 18. 20.	自己育成	10. 14. 16. 7. 21. 8.	自我優越 卓越願望	2. 9. 5. 11. 4.	
	f3 勝利執着	5. 9. 22.	自我優越 成功願望	17. 15. 18.	成功期待	18. 17. 20. 13.	
	f4 自我優越	11.	自我優越	9. 13. 11.	樂觀的 自己顯示	19. 23. 8.	
	f5 自己育成	10. 21.	成功期待	20. 22.	自己育成 成功願望	10. 15. 7.	
	f6 上昇志向	2. 5.	個性尊重 上昇志向	2. 6. 5.	課題指向	21. 14. 1.	
	f7 個性尊重	1. 3.					
年次	f1 個性尊重 実行衝動	2. 8. 12. 14. 16. 19. 23.	勝利執着	13. 18. 17.	成功期待	20. 22. 17. 18. 11. 13. 15.	
	f2 成功期待	13. 15. 17. 18. 20.	個性尊重	3. 6. 12.	樂觀的 勝利執着	2. 5. 9. 8	
	f3 個性尊重	3. 4. 6.	樂觀的 実行衝動	23. 19. 8.	自己育成	7. 10. 12. 16. 14.	
	f4 自己育成	1. 7. 10. 21.	自我優越 卓越願望	2. 4. 5. 11.	課題指向 実行衝動	23. 21. 19. 6.	
	f5 自我優越 成功願望	11. 22.	課題指向 自己育成	10. 21.	個性尊重	3. 4.	
	f6 勝利執着	5. 9.	自己育成	16. 1.	課題指向	1.	
	f7		課題指向成功願望	7. 20. 15.			
年次	f8		自我優越成功願望	14. 22. 9.			
	f1 自己育成	1. 3. 4. 10. 12. 16. 21. 23.	自我優越 成功願望	17. 20. 18. 13. 15.	自我優越	5. 2. 11. 9.	
	f2 自我優越	2. 11. 13. 15. 17.	自己育成	14. 4. 1. 16. 12.	個性尊重	3. 23. 6.	
	f3 勝利執着	5. 9.	課題指向 自我優越	11. 9. 21. 2. 5.	成功期待	18. 15. 20. 17. 22.	
	f4 樂觀的 自己顯示	8. 19	課題指向 自己顯示	8. 7. 10.	自己育成	16. 7. 21. 14.	
	f5 上昇志向	6. 20.	個性尊重	3. 6. 19.	樂觀的 自己顯示	8. 12. 1.	
	f6 個性尊重 実行衝動	7. 14.	実行衝動	23.	課題指向 勝利執着	10. 13.	
年次	f7 成功期待	18. 22.	成功期待	22.	個性尊重 実行衝動	19. 4.	